

京都大学とその化学科 創立 105 周年*

吉永 成亮**

京都帝国大学は明治 29 年、文部大臣 西園寺公望が時の第 94 帝国議会で協賛を得、創設委員として、牧野伸顕（文部次官）、木下広次（専門事務局長、後に初代京大総長）、永井久一郎（会計課長）、折田彦市（第三高等学校長）を任命し審議させた。

文部省で審議された文書のうち、初期のものには「第三高等学校処分方案」と共に、「第三高等学校ヲ更メテ京都帝国大学トナス」との文書もあったが、これは後に線引きして消されている。

筆者が、先年も論じたように¹⁾ 京都帝国大学は第三高等学校はもとより何らの機関も前身として継承したものではない。京大も三高も夫々独立した誇り高き淵源にもとづいて創立され、夫々の歴史を創り上げてきたのである。

かくして京都帝国大学は明治 30 年 6 月 18 日創立記念日を迎え、最初の入学式は同年 9 月 13 日理工科大学（化学科など 8 学科）について行われ、授業もスタートしたのである。法科大学、医科大学の設置は 8 年後、分科大学は 9 年後というように遅れている。従って化学科の創立が京都大学の創立そのものであり、以来連綿としてすべての京大の歴史をふまえてきた、という事になる。

化学科の第 1 回の入学生が 1901 年 3 名卒業し、その 1 人岸喜鑑氏（旧満鉄化学研究所長）は晩年京都化学学会に必ず出席され新卒業生を激励された。筆者もそのお話に京大とその化学科の歴史と伝統を誇りに感じたことである。なお筆者は第 41 回（1941 年）の卒業生であり、今年の第 103 回卒業生とのほぼ中間に位置して今や旧制高校（三高）と京大の創立を省みることのできる最古参の同窓生というに近い。

初代総長 木下広次はフランスの大学出身である。——成人の頃わが国には大学がなかった——そして化学科創立に際して迎えられた教授は後に 4 代総長を勤めた久原躬弦を初めすべて東大の出身であった。京都化学学会は速やかに京大出身者で教官陣を占められるようにとの期待も込めて設立されたと聞いている。創立後 40 年余を経た筆者の在学時には既に 6 講座の全教授が京大出身であったがその精神は受継がれていて反って奇妙な感を覚えた。100 年を超えた現在、多くの他学出身教官が在籍されているのは、戦後新制高校と大学が発足した事もあるが、正反合の哲理にも沿って、真に当然の経過といつてよい。省みて、然し、今昔の感を禁じ得ない。

（補遺）

筆者の入学時は既に化学科は理学部と工学部に分れており更に農学、医学部に化学科が存在していた。薬学部、総合人間学部の化学科は更に後のことである。

昭和 16 年 12 月 8 日の日米開戦が卒業直前におこり、翌年を待たず繰上げて 12 月 28 日卒業という事になった。その直前に全卒業生の徴兵検査が西部講堂で行われ、17 年 2 月 1 日には学卒者の一斉入営という経過をたどったのである。兵役は志願によって陸海軍の短期技術特校となるか徴兵後も幹部候補生を志願できた。第二乙以下という現役外の者も補充兵として招集される時代であったが、軍需産業関係研究所に勤めている者は招集されなかった。ちなみに筆者の同級生中戦死者は 1 名に止った。

戦争が終ると、京大理・工学部出身者から湯川

* 第 149 回京都化学者クラブ例会（2002 年 11 月 2 日）講演

** (株)ユニエル社長

秀樹，福井謙一，利根川進，野依良治といったノーベル賞受賞者を初め多くの優れた科学者を輩出して近代自然科学に多大の貢献をしてきていることは周知の通りである。

文 献

- 1) 吉永成亮；京都化学会報（2000年） 145～156頁